

ハンセン病隔離 反対貫く

小笠原登医師の生涯描いた映画 7日まで名古屋

「病者差別 今でも続いている」 制作者

ハンセン病医療に生涯を捧げ、国の隔離政策に反対し続けた京都大学の小笠原登医師（1888～1970）のドキュメンタリー映画「一人になる」が、伏見ミリオン座（名古屋市中区）で上映されている。7日まで。映画を制作した実行委員会の担当者は「病者差別はコロナ禍の今でも続いている。映画を通して人権を守ることの大切さを知ってほしい」と話す。

小笠原医師は旧甚目寺村（現あま市）の円周寺に生まれた。真宗大谷派の僧侶でもあり、1915年に京都帝国大医学大を卒業後、京大皮膚科特別研究室でハンセン病患者の治療にあたった。

1907年に始まった国による

ハンセン病患者の強制隔離政策。ハンセン病に対する誤った認識から、患者や家族は根強い差別や偏見にさらされ、法律家や宗教団体、医師らも政策に同調した。96年に「らい予防法」が廃止されるまで約90年間、強制隔離は続いた。

元患者たちによる国家賠償請求訴訟で、熊本地裁が2001年に隔離政策の違憲性を認める判決を出し確定。国も謝罪し、元患者に

補償する法律ができた。

小笠原医師は生涯、国の隔離政策に反対し続けた。映画では、患者を守るためにカルテに別の病名を記入して診断書を出したり、診察時もマスクをつけず触診したりしていたことを元患者らが証言している。ハンセン病は感染症でありながら、らい菌の病原性は極めて弱く、たとえ感染しても免疫力が弱い体質の人しか発病しないため、隔離は不要と訴え続けた。

小笠原医師の没後50年を機に真宗大谷派の有志で実行委員を発足させ、6月に映画が完成した。実行委の訓覇浩さん（59）は「私たちもかつて、宗教団体として積極的に隔離に加担してきた。その反省を生かし、次世代につなぐためにこの映画を制作した」と話す。

新型コロナウイルスやエイズなど、今でも病者差別は続いている。訓覇さんは「ハンセン病をきちんと検証できていない結果とも言える。この映画を通して問題の根源を考え、社会への啓発につながればと思う」と訴える。

今後は、あま市や三重県などでも上映を検討しているという。問い合わせは実行委（059・396・0131）へ。（松山紫乃）



ハンセン病隔離政策に反対し続けた京都大学の小笠原登医師



映画「一人になる」の撮影風景
＝いずれも「一人になる」制作実行委員会提供